

小さな手が未来を育てる —イチゴを通した環境配慮型の農育・食育プロジェクト—

仙台農業テック&カフェ・パティシエ専門学校・農育班

1 みどり戦略との関連性

「みどりの食料システム戦略」が掲げる 環境負荷低減型農業・資源循環・食育の推進に関連している。イチゴ栽培を題材に、生分解性資材・食品残渣のコンポスト化・環境に配慮した栽培方法を取り入れ、未来の食と農を担う子どもたちが持続可能な農業を学ぶ機会を設計した。小学生向けの農育企画として、環境配慮型の農業体験をわかりやすく伝えるプログラムを計画し、みどり戦略が目指す「消費者理解の促進と行動変容」に寄与する企画構造となっている。

2 目的・背景

近年、子どもが農業に触れる機会が減少し、食べ物がどのように育つか・環境とどう関わるかを学ぶ場が不足している。一方で農業現場では、プラスチック使用量や残渣処理など環境面の課題が増えており、次世代への環境教育と農業理解の両立が重要になっている。

そこで、子どもたちにも親しみやすい「イチゴ」を通して、栽培・観察・収穫・調理・資源循環までを体験できる農育プログラムを計画した。また、学生が主体となって小学生へ教える構成とすることで、教える側・学ぶ側の双方に学びが生まれる教育モデルとして位置付けた。

3 取組内容

イチゴを題材とした農育イベントを計画し、“育てる・観察する・収穫する・食べる・循環させる”という一連の流れを通して、子どもたちが持続可能な農業と環境のつながりを学べる内容を構成した。

まず、イチゴの特徴や成長のしくみを学ぶ講義と観察を行い、花や実の変化を実際に見て理解できる学習パートを設計した。視覚・触覚・嗅覚など五感を使うことで、植物の成長を「知る」だけでなく「感じる」体験となるよう工夫した。また、身近な作物から自然の仕組みを学べる構成とした。

次に、生分解性ポットや竹繊維、もみ殻などの環境配慮型資材を使用したイチゴポットづくり（図1）を計画した。また、夏イチゴの収穫・調理体験を想定し、収穫したイチゴの食べ比べや、簡単なデザートづくりを楽しめるよう計画した。コンポストの分解過程を観察するプログラムも組み合わせ、食と環境が循環していることを理解できる流れを設計した。

最後に、成長記録をまとめたり学習を計画し、「環境にやさしい農業とは何か」を子どもたちと一緒に考えるワークを盛り込んだ。終了後はイチゴ鉢を家庭に持ち帰り、継続して育ててもらうことで、学びがイベントだけで終わらず、日常の中で続くように構成した。

4 結果

イチゴを通した農育イベントを計画する過程で、プログラム全体の流れや必要な学習要素を体系的に整理することができた。特に「観察→栽培→収穫→調理→資源循環→ふりかえり」という一連の体験を通して子どもたちが自然と農業や環境を理解できる構造を設計できた点は、大きな成果であった。

また、生分解性資材やコンポストの活用など、みどり戦略に沿った環境配慮型の内容を取り入れられたことで、持続可能な農業の学習モデルとしての基盤を整えることができた。学生が小学生に教える形式を想定したことで、指導者側の役割や必要な準備も明確になり、教育的効果が高いプログラムとして発展できる可能性が確認できた。

さらに、季節ごとの活動内容、準備物、安全管理、参加者の動線、保護者・地域との連携の必要性など、実施に向けた具体的な運営項目を整理できたことで、今後の実施に向けた課題や改善点も把握できた。これらのことから、本企画は、実施前の段階であっても「環境教育・農育・食育を組み合わせたイベントの設計手法」を明確化し、実施に向けた準備段階として大きな成果を得たといえる。

表1 学習内容とそのねらい

学習内容	ねらい	活用する感覚
イチゴの観察	植物の成長の仕組みを知る	見る・触る
プランター作り	自分で育てる主体性を育む	触る・選ぶ
収穫体験	食べ物への理解を深める	見る・味わう
コンポストの観察	資源循環を学ぶ	観察・匂い
ふりかえり	学んだことを整理し環境意識を高める	考える



図1 マイイチゴポット

4 考察・まとめ

イチゴという親しみやすい作物を通して、農業・環境・食のつながりを楽しく学べる体験型プログラムを作ることができた点が大きな成果であった。生分解性資材や食品残渣コンポストを取り入れたことで、持続可能な農業を「触って・見て・育てて理解する」教育デザインが完成した。実施には至らなかったものの、教育内容・体験設計・安全面・準備物など、多くの項目を整理できたことで、今後の実施に向けた改善点や運営体制のイメージが明確になった。今後は、地域の学校・企業・農家との連携を強化し、実際のイベントとして展開できるよう準備を進めたい。